
純白で。

コナン1412

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純白で。

【Nコード】

N5041Y

【作者名】

コナン1412

【あらすじ】

きっかけは歩美ちゃんが持ってきた割引券。ちょっとした旅行からコナンの心は変わっていく。カップリングはコ哀です。

色違いワンピース

8月6日

まだ夏休みは始まったばかりだ。

阿笠邸にて。

今日は仲良し5人組でショートケーキを食べている。

「ねえ、歩美の話聞いて！大ニユースがあるの！」

今までケーキに夢中だった元太が顔を上げる。

「おっ！なんだ、歩美。大ニユースって。うな重についてかあ？」
「違うよ元太君。歩美の大ニユースってゆーのはあ……」

と言いながら歩美は自分のバックをあさる。
そして、何やら横長の封筒を取り出した。

「じゃーん！ホテルの割引券！お母さんにね、『皆で行ってきなさい』って渡されたの。」

「そのホテル、僕行ったことあります！とても綺麗なホテルで、近くに動物園があります！」

「わあー、すげーな！なあ、光彦。そのホテルではうな重食えるのか？」

「…それは分かりません。」

「ねえ、コナン君も哀ちゃんもどお？皆で行こうよ！」

「ああ。俺は行けるぜ。」

「私はパス。」

「おい、灰原……」

「何？別に強制じゃないんでしょ？それに、行かない方がいいのは貴方もじゃないの？いつも事件を呼んで子供達を危険な目に合わせないためにも。」

「……にやろ」

すると、急に歩美が悲しそうな目になる。

「ええ……？そんなあ。行こうよ哀ちゃん。コナン君も！これ、1枚2人までで、3枚もらったの。博士も入れて6人でぴったりだよ？勿体無いよ……。事件だって、歩美……んぜん気にしてないんだから！」

ここまで言われたら、どうせ拒否権など無いのだ。

「ええ。分かったわ。行きましょう。ところで博士には……」

「もう言っただろよ！博士も一緒に行ってくれるって！」

「……そう。随分と準備がいいのね。」

「だって、それくらいしておかないと哀ちゃんが一緒に行ってくれないと思ってたんだもん。」

「……」

「でも良かったあ！哀ちゃんが行ってくれないと、女の子は歩美1人だけになっちゃうから。楽しみだね？」

「そうね。」

「当日」

『ピンポン』

朝早く、阿笠邸の玄関のチャイムがリビングに鳴り響く。

ソファで珈琲を飲んでくつろいでいた哀は玄関のドアを開ける。

「あーいちゃん！おはよう！」

「おはよう。あら、随分と早いね。」

「えへへ。楽しみで走って来ちゃった。」

「そう。ところで、後の3人はどうしたのかしら？」

「元太君と光彦君は途中まで一緒に走ってたんだけど、疲れちゃったみたい。もう少しで来ると思うよ。コナン君は待ち合わせしてないから知らない。」

「分かったわ。彼、時間までに来るかしら……」

すると、何やら楽しそうに歩美が近寄ってきた。

「哀ちゃん、昨日の……あの洋服は？」

「ああ。あれなら、明日着るわ。」

「ええっ？そんなあ」。歩美は今日着て来たのに……。哀ちゃん、今着替えてきてよ！」

「……分かったわ。」

そう言っただけで哀は地下室に着替えに行った。

すると、勢いよく玄關のドアが開いた。

「歩美、速すぎだぜ…。」

「元太君がちゃんと走らないからですよ。」

と、元太と光彦が入ってきた。

「あれ、コナン君と灰原さんは？」

「哀ちゃんは今着替え中。コナン君はまだだよ。」

「おせーな、アイツ。」

「もうそろそろ時間になっちゃうよ。」

その頃、コナンは…

「……ハア。早すぎなんだよ。6時半に集合とか…。」

なんてブツブツ言いながら重いリュックを背負って阿笠邸に向かっていた。

いつもより30分早く起きるのも、コナンには苦痛だったのだ。しかし夏の朝は清々しく、その空にはもう太陽が輝いていた。

『ピンポーン』

阿笠邸の目の前でコナンはチャイムを鳴らした。
もう、皆は来ているだろう。

『はい。』

灰原の声だ。

何故か一瞬ドキッとした。
声を聞いたただけなのに。

「あ、俺。」

（わかってるくせに…。）

ガチャガチャと鍵を開ける音がした。
なんとなくドアの手前を這っているアリを見ていた。

―そして。

少し開いたドアから見えた白い裾が…

―白？

―ああ。歩美ちゃんか。

「おはよう歩美ちゃ……」

顔を上げながら言っていたが、途中で言葉が止まった。
目の前に立っていたのは歩美ちゃんではなく…

「は、灰原……？」

目の前に立っている灰原はいつもと違って、今日は膝下で半袖のワンピースだった。

純白で。

綺麗で。

眩しくて。

思わず目を細めてしまう程。

「あら、おはよう。でも残念でした。私は吉田さんではないわ。期待していた相手と違って悪かったわね。」

灰原は奥へ行ってしまった。

俺は中に入りドアの鍵を閉めて、リビングへ向かった。

「あ、コナン君。おはようございます。」

「コナン君おはよう!」

「おいコナン、おせーぞ!」

「悪い。ちょっと寝坊しちゃって。」

皆が俺にあいさつをしてくれたのに、灰原だけはソファに座って雑誌を読んでいる。

あ、さっきあいさつしたんだった。

でも、何故かソワソワする。

声を掛けて欲しくて。

別に好きな訳ではないのに。

すると、歩美が近寄ってきた。

「ねえ、どお？このワンピース。昨日、哀ちゃんと色違いで買ったんだ。歩美がピンクで、哀ちゃんも白！2人でお揃いなんて歩美、嬉しくって！今日早速着てみたんだあ！似合う？」

歩美はクルツと回ってみせた。

ピンクの裾はチラチラと白いフリルを見せながらキレイに円を描いていた。

俺が反応に困っていると、灰原がこっちを見てクスクスと笑っていた。

「ああ。いいんじゃないか？」

これ位の事しか言えない。

しかし、歩美は顔を真っ赤にして本当に嬉しそうだ。

「なあ、博士。コナンも来たし、もうそろそろ行かねえか？」
「そうじゃのう。」

もうそろそろか。と、下ろしたりリュックを再び肩に掛ける。

その後、皆の荷物を車に乗せて俺たちも車に乗った。

元太は助手席。

灰原は窓際がいいと言っていたから、窓際の席。

光彦は灰原の隣がいらいしいが、歩美ちゃんの隣でもありたいと思っ
っているのではないのか。

そして、歩美ちゃんは俺の隣がいいと言っている。

結果、左から灰原、光彦、歩美ちゃん、俺。

灰原が隣だと偽小学生同士、話が出来ると思っていたが、流石に歩
美ちゃんとなると…。

騒がしい車の中、俺は窓の外を見ていた。

灰原が窓際がいいと言った訳が分かる気がする。

朝早く起きたせいか、俺はいつのまにか眠っていた。

「君。——ナン君。——コナン君、着いたよ!」

「——んにゃ?——おう。もう着いたのか。」

「うん!コナン君ったら、寝てる時にイビキかいてたよ!」

「ん、そうかあ?」

「うん!」

どれ位寝ていたのだろうか。

ここは何処だろう。

都会ではない事だけは確か。

あまり人が多くはない。

車から降りて目を擦る。

ここは……動物園か。

そういえば、光彦がホテルの近くにあるって言ってたっけ。
ってことは、ホテルはもう近いのか。

博士は受け付けでチケットを買っている。

元太と歩美ちゃんと光彦は、相変わらず元気よくそこら辺を走り回っている。

灰原はというと。

木陰で風と戯れていた。

真っ白な罽の広い帽子を被って、少しヒールのある白いサンダルを履いて。

灰原の向こうには地面と青空だけ。

まるで絵になりそうなくらい、綺麗な景色で。

綺麗で。

本当に綺麗で。

白い帽子

俺は知らないうちに灰原に見とれていた。

あれ？そういえば、洋服は歩美ちゃんとお揃いなのに歩美ちゃんはあんな帽子被ってたっけ。

フと歩美ちゃんの方を見してみる。

やっぱり彼女は被ってない。

別にそんなに気になる訳ではないのに、なんとなく話したくて聞いてみた。

「どうしたんだよ、その帽子。」

「どうしたって…どういうこと？」

「だから、歩美ちゃんはそんな帽子被ってないから。」

「ああ、これはフサエさんから貰ったのよ。」

『これ』と、灰原は帽子の鐔端を持って更に深く被った。

彼女の顔は見えなくなり、緋色の髪が風に揺れている。

「最近フサエさん、よく博士ん家来るもんな。」

「ええ。」

「フサエさんと上手いくといいんだけど。」

「そうね。」

ザワザワと木の葉と葉のぶつかる音がする。

灰原は右手で帽子が飛ばないように押さえている。

「彼女、とても優しいの。」

『彼女』とはフサエさんのことだろう。

「この前、近くのショッピングモールに連れて行ってもらったの。そしたら、『私のこと、母親のように親ってくれたら嬉しいわ。』って。その日は沢山洋服を買って、あと美味しいアイスもご馳走してもらったわ。」

そう話す灰原の顔は穏やかだ。

「楽しかった…」

「……そうか。良かったな。」

俺がそう言った直後に、歩美ちゃんが俺たちを呼んだ。

「哀ちゃん！コナンくん！行くよー！」

声が響く。

歩美ちゃんは入園口の手前にいた。
その隣に博士。

元太と光彦はもう中に入った様だ。

「ほら。行くわよ。」

「ああ。」

俺と灰原は入園口へ歩いて行った。

中に入ると、まず正面には大きな園内の地図。
そして、右に植物園。
左にはお土産売り場。

「何から見るかの？」

「まずお土産からだろ！」

「元太君、お土産は一番最後に見るものですよ。」

元太がボケで、光彦がツツコミ。

いつかこの2人、お笑い組んじゃないか、と思うくらい定番の会話となっている。

「ねえ、コナン君は何から見たい？」

「ん？適当に手前から見ていけばいいんじゃないか？」

それ以外何があるというのだ。

とりあえず、元太が植物園など見なくてもよいと言い張るので、そこは見ずに真っ直ぐ歩いて行く。

すると、ふれ合い広場が現れた。

どうやらここでは、兎やモルモット、ヒヨコ、鼠を触ることが出来るらしい。

俺たちはふれ合い広場に入って行った。

中には多くの子どもたちが家族と共に動物とふれ合っていた。

ふれ合うというより、人間が一方的に触っているのだから…。

俺たちは博士が座った黄色の小さなベンチに荷物を置き、動物を触りに行った。

元太と光彦と歩美ちゃんはモルモットを、俺と灰原は兎を触っていた。

兎は大人しく撫でられていた。

俺が抱いているのは真っ黒な兎。

毛並みが綺麗で、黒くクリクリした目が可愛らしい。

一方、灰原は兎を抱かずにカゴに入れたまま撫でている。
こちらは真っ白な兎。

目は赤。

同様に、毛並みは綺麗だ。

灰原に撫でられている兎は心地が良いのか、目蓋が重そうだ。

「灰原の撫でてる兎、なんだか眠そうだな。」

「そうね。貴方と違って撫でる場所がいいんじゃない？」

「（可愛くね？ 奴）そ、そうかあ？」

「そうよ。」

少々悔しかった俺は、灰原と同じ様に、同じ場所を撫でてみた。

しかし、兎は真ん丸な目をパチクリさせて、眠そうな気配は一切感じられない。

それを見た灰原はクスクスと笑いやがる。

「貴方のことが嫌いなんじゃない？」

「なんだとオ？」

「冗談よ。」

灰原はまたクスクスと笑った。

白い帽子としゃがんだスカートの裾が灰原が笑うのに合わせて小刻みに揺れている。

ふれ合い広場を出ると、目の前にはキリンが。

「わあ。キリンさん、首ながーい！」

「すげーな！」

そう言うと、歩美ちゃんと元太と光彦は麒麟の方へ走って行った。

「ホント、元気ね。あの子たち……。」

「ああ。そうだな。」

「そうじゃのう。」

灰原は相変わらず冷めた目だ。

麒麟を見るのに飽きた3人は鳥のコーナーへ行き、その後「爬虫類館」と大きな看板のある建物に入って行った。

俺たち3人もその後を追う。

俺たちが爬虫類館に入ると、ヘビを見ている元太達を見つけた。どうやら光彦が元太と歩美ちゃんに色々と説明をしているようだ。

「やっと追いついた。オメーら見ていくスピードが速いんだよ。」

「オメーらが遅せえんじゃないかあ。」

（あのなあ……。ちつとあこつちのことも考えろよ……。）

なんて思いながら俺は、自分の目の前にある緑色のヘビを見た。重そうな一本線の身体を、器用に木に絡めて眠っている。

「何してるの？行くわよ」

気がついて、周りを見る。

「博士たちなら、もう見えない程向こうに行っちゃったわよ。早く行くわよ。」

「あ、ああ。悪い。」

（き、気づかなかった……）

爬虫類館を出ると中が暗かったせいか、外が眩しすぎて、一瞬目を瞑る。

更に、息苦しい程の暑さ。

太陽が俺たちを睨みつけ、湿気が服の中に溜まって苛々する。

『シューッ』

何かが背中に吹きかけられ、途端にスーッと冷たさが背中を伝う。

驚いて後ろを見ると、

「シーブリーズよ」と言って灰原が自分の腕にも付けていた。

石鹸の様な、とてもいい香りがする。

女の子らしい香りだ。

ただ、灰原がその様な物を使っているのには驚いた。

「おまえがそんな物使うなんて、珍しいな。」

「たまたまよ。貰ったの。私も最初は抵抗があったけど、使ってみると結構便利だから。」

「ふーん。」

すると彼女は俺の顔に、そのスプレー缶を向けた。

（ヤベッ！やられる！）

そう思って俺は、ギョッと目を強く瞑った。

「シューッ」

スプレーが噴射した。

と言っても、俺が確認出来るのは音だけだ。

顔が濡れたわけでもなければ、香りがするわけでもない。
俺は恐る恐る目を開けた。

すると、スプレー缶はまだ顔の目の前に。

正直、めちゃくちゃビビった。

その様子に灰原はクスクスと笑いながら言う。

「今のスプレーの音、私が口で言ったのよ。」

「……………え。……………ってか、はあああゝ？マジでビビったぜ…………。」

「そう？嬉しいわ。」

「ハア……。嬉しくねえー。」

そして、また灰原はクスクスと笑う。
それに俺もつられて笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5041y/>

純白で。

2011年12月2日16時47分発行